

江原由美子著（有斐閣、2022年）

## 持続するフェミニズムのために グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ

板井 広明\*

本書は著者の長年のフェミニズム研究を振り返り、「グローバリゼーション…が強まった1990年代以降における「性の平等」を求める思想としてのフェミニズムの方向性を考える」ものである。以下、各章での議論の要点をまとめておく。

「第1章 この50年、何が変わり、何が変わらなかったのか」では、1970年代と2020年代で進展があった大学進学率などに対して、女性の賃金率や政治参加率、男性の家事労働分担率などの増加如何は各国で違いが大きく、女性への人権侵害も深刻化しており、フェミニズムの必要性は減じていないという。

「第2章 フェミニズムを社会変動の中に置く」では、女性参政権運動が軸の第一波フェミニズムから、実質的平等や「性と生殖における権利」の確立と固定的性別役割の廃止を主張した第二波フェミニズムへの流れを鳥瞰している。

「第3章 グローバリゼーションは何をもたらしたか」では、グローバル化によって、新興国が経済成長する一方、先進国では成長の鈍化と所得格差の拡大が生じ、女性の職業参加が増加するものの、性別役割分業の強化、雇用の流動化、女性の貧困がもたらされ、性の平等に結び付かなかったこと、そしてベックの「第一の近代」から液状化（個人化）する社会における不安定性などに満ちた「第二の近代」に対してフェミニズムがどう対応すべきかが論じられている。

「第4章 グローバリゼーションと第二波フェミニズム」では、第二波フェミニズムが第二の近代に十分対応できてこなかったことを問い、ネオリベリズムの侍女になってしまったというフレイザーの批判が取り上げられている。フレイザーの批判は、①家族賃金批判により能力主義に棹さしたこと、②平等分配のための政治経済的批判を

すべき時にアイデンティティーや差異の承認という「文化主義」をとったこと、③女性の自律を妨害してきた福祉国家的パターンリズム批判を行ない「ネオリベリズムに手を貸」したことに向けられ、この第二波フェミニズムの戦略的誤りが、「旧労働者階級」の人々を右翼ポピュリズムに追いやってしまったという。しかし、著者は、フレイザーが言及する第二波フェミニズムの内実が曖昧であることに疑問を呈している。

「第5章 フェミニズム・ケア・福祉国家」では、社会民主主義とネオリベリズムとを敵対関係と捉え、後者が前者に置き換わるというフレイザーの見立てを批判し、エスピン＝アンデルセンの福祉レジーム論のように類型として捉えるならば、フレイザーは自由主義レジームのアメリカの状況しか見ておらず、他のレジームでの異なったフェミニストの課題を見逃していると批判する。

「第6章 追われる国の政治的分断とフェミニズム」では、格差拡大を背景に民族主義・排外主義・人種差別主義という右翼ポピュリズムが台頭したのは、エリート的な中産階級リベラルの考えに労働者階級が反発したこと、また第二波フェミニズムが文化主義に陥り、承認を主張しつつも再分配の政治に繋がらないことを見落としたというフレイザーの指摘の的確さを挙げている。

「終章 これからのフェミニズムの方向を考える」では、まずフレイザーのネオリベリズムの侍女批判は利敵行為という外在的批判に過ぎず、内在的批判でなければフェミニズムの理論的發展は望めないと批判する。

またフレイザーが「市場経済を前提とし、「能力主義的達成」「個人的自立」「個人の選択肢の増大」などを是とする経済思想・社会思想」としてネオリベリズムを捉えることは「ケア」の「家族主

\* 専修大学経済学部

義的・地域主義的解決を求める新保守主義」と、強く手を組んでいる」点などから適切ではないことを指摘している。

また「女性の能力主義的達成を応援する」だけのフェミニズムへの批判と「個人的自立のための資源や増大する選択肢、能力主義的達成」を志向する「女性の生き方」への批判が混在しており、両者は適切に腑分けすべき事柄であると指摘する。腑分けがされないと、例えば専業主婦願望を持つ不安を抱える若年女性を家父長制に囚われた存在として是認しない点で問題となるのであり、つまり家族による包摂を求める個人としての女性のあり方を否定し、あるべき社会変革の方向性に回収しようとする権力的振る舞いでしかないと批判している。

フェミニズムの個人主義的傾向も、社会民主主義の立場を採るフレイザーからすればネオリベリズムに棹さす問題に映るのと同時に、家父長制支持者からすれば伝統的な秩序や家族を破壊する「身勝手に強欲な個人主義者」と映ってしまうことに、同様の腑分けの慎重さが求められるとしている。

フレイザーの第二波フェミニズムに関する文化主義的偏向という批判について、著者は文化主義（承認の政治）と経済主義（再分配の政治）をトレードオフの関係と見做すべきではなく、経済的な不遇に追いやられてきたマイノリティーが再分配を要求すると同時に、劣等性の表象を押し付けられてきたことを跳ね返して承認を要求するためにも文化主義と経済主義の双方の視点が必要であると主張する。両視点を見失うと、女性や労働者階級が右翼ポピュリズムに引き寄せられたのは経

済的な不利益だけでなく、「リベラル派からの「差別主義者」というレッテル貼りこそが、非和解的対立を引き起こしている」点を見落としてしまうのだというのである。

以上のように、安易なりベラル批判やネオリベ批判ではなく、著者がフレイザーの第二波フェミニズム批判を参照軸に今後のフェミニズムを論じる足場を築き、丁寧な議論を展開している点は評価できる。ただフレイザーが「フェミニズムはどうして資本主義の侍女となってしまったのか」（『早稲田文学』2019年冬号）で「私たちの性差別批判が、いまや不平等と搾取の新しい形式のための正当化を供給しているのではないかと吐露し、第二波フェミニズムへの3つの批判が自己批判だったこととは、本書はやや趣を異にしている印象を抱いた。

また第二波フェミニズムの「個人的なことは政治的なことである」は権力的作用をあらゆる空間において看取り、批判を行なうことの重要性を喚起したが、一方で自律的人間ではないモデルとして個人が個人として保護されるべき領域はいかに確保されるのか、つまり今後のフェミニズムにおける価値理念としての人間像や社会像も提示されるべきだったのではないかと。

一冊で論じるには無理があるのだけれども、交叉性や周縁化の問題に言及があるとは言え、昨今、改めてフェミニズムにおいて問題化している人種主義や植民地主義、セクシュアリティの問題、そして気候正義に関連したエコフェミニズムや障害、動物の問題にも立ち入った議論が今後必要になってくることと思われる。